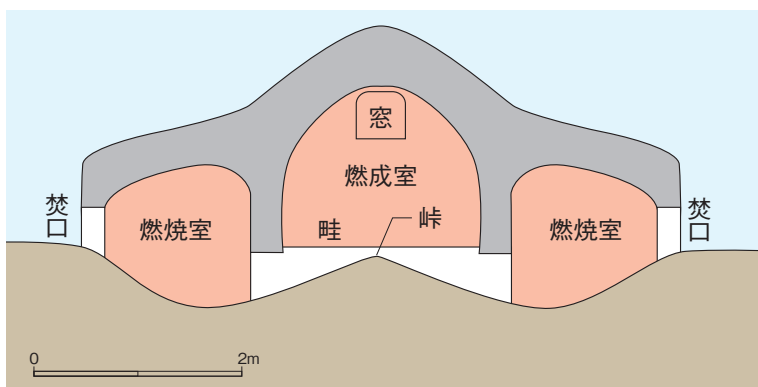


小松瓦と鬼師



金沢城と日末産の瓦 日末瓦窯跡で生産された灰色のいぶし瓦は、前田家の城郭などに使用された建築材で、軒を飾る瓦には梅鉢文もみられる。



瓦窯の復元図
いぶし瓦の生産には、焚口が両側に付いた「達磨窯」や片口の「竪窯」が利用されていた。

寛永十六年（一六三九）、幕府に隠居を認められた加賀藩三代藩主前田利常は、小松城を隠居所に定め、一国一城令で廃城となっていた城の整備に着手した。その様子を伝える史料の中に、利常が蓮代寺村において瓦工忠右衛門に瓦を焼かせた記録（「三州名所記」など）がある。

「よき瓦土」が産出した蓮代寺村は、木場潟の東岸にあって瓦の生産に必要な燃料と小松城への水運に恵まれていた。集落の南方に所在する窯跡からは、江戸時代前期のいぶし瓦が出土しており、蓮代寺で焼かれた瓦が、小松城に加えて金沢城の普請にも使用されたことが明らかとなっている。

さらに、柴山潟から今江潟へ抜ける水路に面した日末・松崎の両村におい

でも、いぶし瓦の窯場が設営されている。焼かれた瓦は、金沢城の石川門周辺や利常が造営を指揮した高岡の瑞龍寺の堂舎にも葺かれたことで、小松における瓦生産が高まり、その産地化が進んだものと考えられる。

江戸時代後期に藩の規制が緩むと、板葺きの家並が一般的であった金沢や小松の城下町でも、屋根に「赤瓦」を葺く建物が見受けられるようになった。天保期の金沢の風景を描いた「金沢城下図屏風」には、町並みの中に赤い屋根の土蔵や山門が描かれ、有力な商家と寺院を中心として赤瓦が普及したと云われている。

金沢の寺町に所在する妙典寺山門に葺かれた赤瓦は、享和二年（一八〇二）に八幡村の瓦屋が製造したもので、翌年には市内本光寺の鐘楼門に同じ瓦屋の鬼瓦が棟上げされている。

これら角をもつ鬼面の瓦は、「作人」と自称した瓦工が、魔除けの棟飾りとして造作したものである。そして寺院の大屋根にも小松産の赤瓦が葺かれ、

頭に経巻を載せて、左右に雲形の鱗を付けた獅子口の鬼瓦が広まると、作人は「鬼師」と呼ばれはじめた。

また小松の赤瓦は、越前瓦の技術を導入したもので、釉薬の色合いにその違いをみせている。文化年間の金沢城二ノ丸造営では、八幡・蓮代寺両村の瓦師が、藩が発注した大量の「土瓦」

を受注するまでに発展している。

その後、明治期に入ると能美郡の瓦生産は、組合組織するまでに発展している。瓦屋の屋号を示す刻印を押した赤瓦が、安宅湊から「小松瓦」の名前で各地へ運ばれ、赤い家並みが形成されていった。
(垣内光次郎)



鐘楼門の鬼瓦 本光寺(大文字町)の鐘楼門は江戸時代の建築で、屋根に葺かれた赤瓦は、享和3年(1803)に八幡村の瓦屋が製造したことを鬼瓦の銘文は伝えている。



赤瓦の家並み 加賀地方に普及した小松瓦は、赤の家並みを生んだ。屋根の棟には凝灰岩の棟石が生まれ、加賀独自の建物風景となった。